

公衆衛生医になるまでの 長い道のり

医学学生だったころ、故郷の飯田保健所で1週間の実習を経験しました。住民検診で一人ひとりの眼底所見をスケッチし、昨年のそれと比較して健康指導をしておられた藤島弘道所長の印象が強く、保健所の仕事は永らく私のあこがれでした。思えばたいぶ寄り道をしてきました。

公衆衛生医になりたくて 医学部へ

私はもともと公衆衛生医になりたいと思って医学部に進学しました。第38回の津田侑子先生も書いておられましたが、私も当時ネパールで結核対策に働く岩村昇先生にあこがれて医師をめざしました。在学中も公衆衛生医になることを広言しており、公衆衛生学の教授について夏休みにフィリピン、タイ、台湾の3国を巡るツアーに参加もしました。そこでタイの医学生に日本の医療制度のことをあれこれ質問され、全然答えられなかったので、日本の医師としての

研修をまずすべきと考え、2年間臨床に携わることにしました。

故郷の長野県に戻り、長野中央病院で開院来初となる研修医として医師人生を始めました。研修医とはいえ半年もすれば立派な労働力として期待され、若さのせいもあって中高年の女性患者に好かれました。内視鏡で早期胃がんを見つけて自信もつけさせてもらいました。生協病院でしたので地域の学習会や検診にもよく出かけ、未病の時期の取り組みの大切さを自分でも思い、他人にも語ったものでした。医師層の厚くない病院でしたので、2年間の約束を3年にしてもらえないかと頼まれ、引き受ける代わりに3年目の半ばに、

東大医科研で毎年開催されていた「熱帯病研修3ヶ月コース」を受けさせてもらいました。港区白金台のキャンパスに毎日通い、学生時代はあんなにきらっていた基礎科目が非常におもしろいことを知りました。同じキャンパスには国立公衆衛生院がありました。こちらは顔を背けてしまいました。

公衆衛生医として 途上国で実践

研修から長野に戻るとすぐにJICAから声がかかり、インドネシアでマラリアを制圧するプロジェクトに参加することになりました。1983年夏から1年間、インドネシア・北スマトラ州に出かけ、海岸に発生するマラリアの制圧に力を注ぎました。

蚊へのマラリア伝播を起させる生殖母体というのは10歳以下の



長野県伊那保健所長
松岡 裕之

長野県出身。昭和55年新潟大学医学部卒業、長野中央病院で内科医として4年間勤務。59年より岡山大学助手、平成元年三重大学講師。8年自治医科大学助教授、17年同教授(医動物学)。28年4月より長野県健康福祉部。

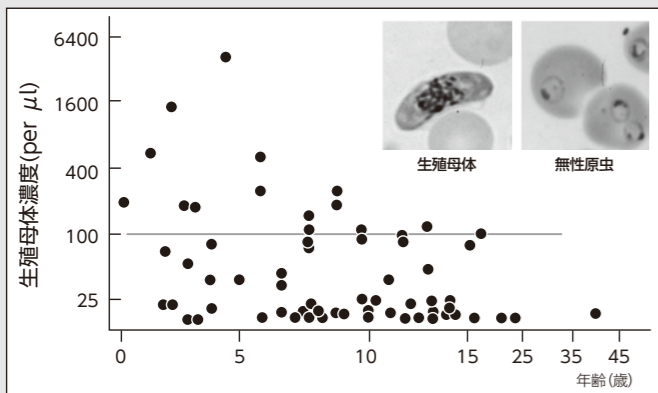
小児に多く出ることを見出し(図)、小児を中心に生殖母体を殺す薬剤(プリマキン)を投与したところ、翌年には新規のマラリア患者がまったく出なくなりました。私の後任が同じ方法を他地域に広げて実施してくれ、やはり新規患者の発生を封じ込めることに成功しました。

そんな成功例を体験したため、すっかりマラリア制圧に心を奪われてしまった私は、そのまま医学部の基礎教室に籍を置くこととなりました。そしてそれから30余年、マラリア、特にその生殖母体をライバルと定め、基礎研究・フィールド研究を続けてきました。岩村先生のやっておられた結核対策とは異なりましたが、発展途上国の人たちに役立つ仕事をやってきたという点では、いま振り返ってみると筋を通してきたようにも思えます。

マラリアは制圧されるか

2015年のノーベル生理学・医学賞を覚えておられますか。イベルメクチンの大村智先生に並んで、抗マラリア薬アーテスネートを発見した中国のTu Youyouさんが受賞されました。この薬はチンハオスーという薬草から抽出・精製され、さらに合成薬として大量に生産されるようになった薬です。マラリア患者の症状を除くことはもちろん、先述の生殖母体も

図 生殖母体は小児が多くもっている



殺す作用をもっていますので、新規のマラリア感染蚊が出てこないのです。私はこの作用のほうがマラリア制圧のためには重要だと考えています。マラリア対策ではこのほか蚊帳を安価で普及させることで、蚊帳に入って眠り、マラリアのみならずデング熱やジカ熱を予防できるといったキャンペーンも相当浸透してきています。昨今の調査ではマラリアによる死亡者は10年前の40%減であると推測され、人類最大の感染症もその姿を変え始めたようです。

故郷で働き始めて

60歳になり、いよいよマラリアも封じ込めのめどが立ったと思ひ、私は故郷に戻ってきました。長野県を見渡すと発展途上国とまでは申しませんが、医療過疎が著しく3月まで担当していた伊那広域では医師数もベッド数も全国最低レベルに沈んでいます。国の出した地域医療構想で国内はケンケンガクガクしていますが、当地域ではほとんどベッドを減らす必要がありません。それよりいまのベッド

数を維持していけるのか、増加する在宅医療の需要に応えられるのか、が焦眉の課題となっています。伊那地域から青雲の志をもって中央に出てゆき、各医療分野で身を立て名を挙げている人は多々いるのですが、故郷のほうはとても寒い状況にあります。地域医療を担っておられる開業医の先生方とおつきあいを始めましたが、60歳の私が堂々と本場の「若手」に分類されてしまうほどです。医師確保はもしや保健所の重要課題なのではないでしょうか。

2016年10月から所長を拝命しまして毎日繰り広げられる保健所活動に感動の毎日です。初日から食中毒の行政処分が出ましたし、措置入院も続々と出ています。マラリアこそ出ていませんが、結核はポチポチ出ており、接触者検診やDOTSなどを実施しています。が、まだまだこの疾病から逃れるには時間がかかりそうです。難病患者や障がい者など社会的弱者も意識的に守らねばなりません。迷い犬や野良猫にも優しくしていただきます。動物に優しい社会はきっと余裕とゆとりのある社会で